

月刊 わらじ 7月号

特集 くせ

二〇二五年七月一日 毎月一回一日発行 通巻五六二号
一九八四年十月四日 第三種郵便物認可 頒価二〇〇円



わらじ夏合宿のひとこま……そう思った人も少なくないのではないかな。でも、そうではない。ここは越谷市。元荒川右岸の砂原土手だ。車いすに座る橋本克己画伯のお気に入りの場所の一つ。毎週金曜早朝の月刊わらじ配達の際に、月一度はこのコースを通ることになっている。県営荻島団地の3軒のお宅から砂原土手のケアマネさんのお宅の間にこの道があるのだ。

でも、それだけではない。いまは見えなくなった画伯が、1982年に手動チェーン式車椅子で一人で街に出始めた頃のお気に入りの場所の一つがこの道だった。当時の画伯は「川の道」と名付け、絵葉書にもよく描いていた。

著書「克己絵日記」にも出て来るその風景の中の自画像について、政治社会学者の栗原彬さんは、わらじの会市民福祉講座でこう言っている。「克己さんが車いすで一人野にたたずんでいる。野っばらに一人でじっとしている。あんなに淋しがり屋の彼がなぜそうしているのか。彼に聞いてもあまりはかばかしい答えは出てこない。これは私たちが死に物狂いで考えなくてはなりません。」

講演録はあるのだが、ここは伏せておこう。「死に物狂いで考えなくては」と言われているのだから。解はひとつではない。克己絵日記1から30年を経たいまでも、この道を月一回歩いているのはなぜだろうか。

小さな新聞 7月号

CHISAWASHINBUN
第00506号(月曜)の会
2025年
花火大会
7月26日
越谷市
花火大会
7月26日
越谷市

職場参加とすめめ会総会シンポジウム 窓を開け続けること 6.22

の月22日NPO法人・障害者の職場参加をすすめる会の定期総会・記念シンポジウム・ワークショップが行われた。総会では、2024年、法人設立以来の本部事務局、越谷の世一様を、就労四型「せんげん台世一様」のすぐ近くに引っ越すことを含めた、新たなチャレンジを決議。

総会記念シンポジウムのタイトルは、「人の狭間で人として生きる」。コーディネーターは、県立大名誉教授の朝日さん。思春期にひんぱんなてんかん発作があった柴田さん、自閉症と診断され絶望し暴れた幡本さん、障害児を普通学校へ全国連絡会世話人の竹迫さんがシンポジスト。柴田さん幡本さん

は通常学校、高校で共に学んでいたからトラブルも起こり、だからこそ出会いも積み重ね、地域で共に働くことにもつながった。一ヶ月「一年ぐらいで首になりながらも仕事を探し続け、柴田さんは市場の菓子問屋の佐々商事で20年働き退職、幡本さんは今の会社で今も働き続けている。

◆地域活動支援センター「バタバタ」武蔵野前へ引っ越し中。
◆本田勲さんへ看取り(日部市)千葉大細のりハビリテーション病院に転院。

◆橋本克己さんへ感謝(谷市)お湯でやけど。毎日就着さんの手当てで軽快。
◆社団・入院時介護、保障のキーグループ。

◆山本高行さんへ感謝(谷市)肺炎、肺臓病で緊急入院。危機一髪で、命が助かった。

竹迫さんは「今は特別支援教育に分けられているから、なおさら共に働けない状況が生まれている。県とか国に訴えているが、力不足で。特例子会社とか福祉のほうとか、働くところもほとんど分かれていて」と語る。朝日さんは「障害者にはこういう配慮や環境が必要だって協調しすぎちゃうと、システム的なものになっちゃう」と。

朝日さん「佐々商事で働いていたことは、人生においてよかったですか?」
柴田さん「よかった。理解がなくても働けますよ」
朝日さん「強い気持ちも大事ですね」
幡本さん「そんなに準備が整わなくてもいいと思う」
竹迫さん「人の中でトランプがあっても何とかしてゆこうというところを、お互い経験していくことが大事なのかな」と
朝日さん「狭間って窓という意味もあるんですよ。窓は小さくともいい、開け続けていることに意義があるのではと思いました」